

夜間中学 あってはいけないけれど無くてはならない学校

本来、教育を受ける機会というのは、すべての人に平等に保障されるものです。しかし、残念ながら、そのような状況に必ずしもなっていません。教育を受けられなかった方々の学び場として、夜間中学というのは無くてはならない学校になっています。夜間中学は、戦争や部落差別の問題をはじめとして、いろいろな事情で義務教育を受ける権利を保障されなかった方々が、その権利を取り戻すために生まれた学校です。

奈良市立春日中学校夜間学級の卒業生である西畑保さんにお話を伺いました。

■少年時代のお話を聞かせてください。

母が離婚して三重県の紀和町（現在の熊野市）の実家へ戻っていたとき、お腹の中には9ヶ月の僕がいました。母に再婚話があり、和歌山県の熊野川町（現在の新宮市）に住む父と結婚しました。父は、山奥で炭焼きをしている人でした。僕が生まれてから、母はすぐに妊娠しました。僕が男でしたから、次に生まれてくる子が男の子だったら、父が弟の方をかわいがるとして母は心配し、毎日、女の子が生まれてくるようにと祈っていたそうです。生まれてきたのは男の子。母はがっくりしたそうです。父には前の妻との子もいて、最終的には5人の姉弟となりました。山奥の炭焼き小屋から小学校まで遠く、夏場しか学校に行けませんでした。

1946年、小学校2年生のとき、当時の100円（現在の価値で2万円ほど）を教室でなくしてしまいました。お金はすぐに見つかりましたが、自分のものと言っても信じてもらえません。雁皮の樹皮を干して、売って貯めたお金でしたが、廊下に立たされ、「嘘つき」と言って唾を吐いて通る子もいました。3日ほど休んで学校へ行くと、みんなが机の上の物を隠しました。それから1週間ほどして学校に行ったら、僕の机が廊下に出されていました。そこから学校へ行かず、炭焼きの仕事を手伝っていました。



■働き始めた頃の話聞かせてください。

12歳のとき、隣のおばちゃんのお世話で三重県熊野市の木本のパン屋さんに働きに行きました。そのときに、初めて焼きたてのパンを食べることができ、本当に楽しかったです。そこで豆腐屋さんで働く11歳の友達もできて、「俺は将来、豆腐屋を開きたい」という話を聞きました。僕の夢は何かなど考え

ながら、2年間働きしました。14歳のとき、奈良県の御所市に働きに行きました。そこで働いていたときに初めて読み書きのことで苦労しました。意地悪な先輩がいて、辞書で調べて、わざわざ難しい漢字で「暇」などと書いたメモを渡され買い物に行かされました。一番辛かったのは電話で聞くことでした。お寿司と吸い物と茶碗蒸しなど、たくさんあると覚えられないし、相手の電話番号も聞き直していました。優しい先輩は、電話のとき横でメモを書いてくれました。そこで2、3年働いて、あるとき、映画館の前で寿司屋さんがあり、店員募集と書いてありました。募集という字は読めなかったけど、これは店員募集のことかなと思って、働かせてくださいと言ったら、名前と住所を書いてくれと言われました。僕は書けるはずがありません。字が書けない人は雇えないとも言われましたが、帰りかけようとしたとき、働いてみるか、と言われて、そこで働くことになりました。しかし、毎日ほとんど自転車での出前でした。それから大阪府の店を何回か変わりました。職場で、運転免許や調理師の免許の話聞いたときに、僕には夢のまた夢だと思っていました。けれども店の大将が「ちやうりしめんきよしけんううんてんしけんしけん」と言ってくれて、〇×の試験だったから通りました。その後、大阪府の泉佐野市に働きに行っていたとき、ちやうど関西空港ができる前で、店のお客さんに反対の署名を頼まれました。名前を書けず、喧嘩になったこともあります。それからずっとお店を転々としていましたが、30歳の頃、奈良市のお寿司屋さんと働くことになりました。この店で働いている人たちは、僕が読み書きができないことを本当に理解してくれました。

■結婚された頃の話聞かせてください。

読み書きができないから結婚は無理だと思っていましたが、35歳になって、ある方のお世話で見合いをすることになりました。見合いの席で素晴らしい

人が座っていて、一目惚れしたわけです。笑顔の素敵な人です。話をしていたら、本当に初めて好きになって、仲人さんをお願いしますと言いました。なかなか返事が来なくて、だめかと思っていましたが、一週間するとよい返事をいただきました。僕が読み書きできないということを仲人さんにも相手にも話せず、隠したまま結婚しました。結婚後も、毎日、読み書きができないことが頭の中になりました。あるとき妻に、「お父さん、そこに自分の名前書いて。」と言われました。そのとき、ばれたのです。自分が字を書けないことで相手もびっくりしていたけれど、これで結婚も終わりかなと思ったのですが、妻が「辛かったですよ。一緒に頑張りましょう。」と言ってくれました。それから銀行へ行くのも、どこへ行くのも妻と一緒にきました。妻には、「せめて私の名前とあんたの名前と住所ぐらいは書いてほしい。」と言われて毎日練習です。それがとても嫌でした。そのうち子どもができました。子どもができて市役所へ出生届を出すとき、どうしようかなと思って、包帯を手巻いて代筆を頼みました。ちょっと待ちましたけど、届を出すことができました。やはり自分の子どもの名前は自分の手で書きたいと思いましたよ。それからすぐ二人目の子どもができ、同じようにしました。子どもが小学校に行きだしたときに、「お父ちゃんが字を書いているのを見たことがない。」と言われたのが、一番こたえました。妻が「お父ちゃんは、家族のために働いているの。お父ちゃんは苦労して、学校へ行くことができなかったのよ。」とうまく言うてくれました。子どもも納得して、妻のおかげで親子の仲も良く、子どもは親思いに育ちました。

■夜間中学との出会いを教えてください。

夜9時に仕事を終えて帰るとき、春日中学校夜間学級の前をいつも通っていました。あるとき年配の方が鞆を提げて出てきました。「ここは、何をするといいですか。」と聞いたら、ここは夜間中学で、勉強するところだと教えてもらいました。定年の65歳になったら、僕はこの夜間中学へ行こうと決めました。定年になってすぐに入学の手続きをして、妻と子どもと前、「夜間中学に行く。」と言ったら、とても喜んでくれました。

学校に入学して2・3年たつと、新聞を読むのが好きになりました。新聞を読んでいたら、住友信託銀行（現在の三井住友信託銀行）が、妻か

ら夫へ、夫から妻へのラブレターの募集をしてみました。はがき1枚ですが、本当に難しいと思いました。「今、夜間中学で勉強しています。勉強できたら、妻に愛を込めたラブレター書きませ。」と書いて応募したのです。夢にも思いませんでしたが、入選しました。それがきっかけで、文章を書くのが好きになりました。先生の勧めもあって、部落解放文学賞などに応募して、5回ほど入選しました。

僕は、元々、子どもと妻に手紙を書こうと思って夜間中学に入学したのです。そして、妻へのラブレターを書こうと思って、便せんに7枚、初めて書いたのです。クリスマスの日に渡そうと思って、11月頃からずっと書いて、やっとクリスマスの日に渡すことができました。結婚して、35年かかったわけです、妻に手紙を書くことに。手紙を渡したとき、妻は喜んでくれました。その頃、たまたま新聞記者が学校に来ていて、記事にしたいと言って新聞に載せてくれました。それがきっかけになって、テレビなどにも出させていただきました。



僕は、夜間中学に入学するまでは、自分の名前も住所も書けませんでした。夜間中学に行ったら初めて自分の名前を書いたときは、本当にうれしかったことを今でも覚えています。夜間中学へ行ったらたくさんの出会いがありました。本当にありがたく思っています。妻は亡くなりましたが、今、僕は85歳、孫も5人いて、本当に幸せです。

今も奈良市古市の識字学級で学び続けています。

プロフィール

にしはた たもつ
西畑 保 さん（表紙の人）

- 奈良市立春日中学校夜間学級卒業生
- 春日夜間中学を育てる会 会長